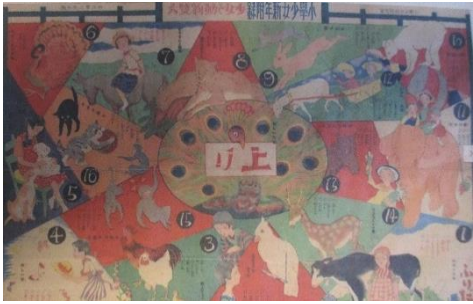


夢二がえがく動物ワンダーランド

～大正ロマンのイラスト&デザインを中心に～

竹久夢二美術館（文京区・弥生） 24.04.06～06.30



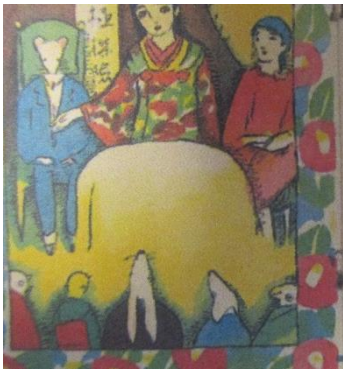
動物は、生活の上で人間と様々な関わりを持ちながら、美術の文化においても数多く題材となり、幅広い表現が展開されている。

対象ロマンの画家「竹久夢二」（1884～1934）は、小動物を飼育し、また動物園にも足を運んで動物に関心を寄せていた。「夢二」が描く女性絵や童画は、犬、猫をはじめ

とする動物が人に寄り添い、さらに書籍装丁や双六では、遊び心を加えて動物の姿を図案化している。

《少女と動物双六》 1925年 上図

《鼠の探検》 1911年 左図



『鼠の探検』（抜水）与謝野晶子 新カナ使いに修正
人間の子供や兎や猿やインコウやカナリヤが集まって、正月のある晩を楽しく遊ぼうとしていました。

番組の第一番は、「鼠」のお話で、その題目は、“私の北極探検”というのでした。「たいしたものですね鼠さんは」、「そんな冒険家とは知らなかったわ」「一体何時いらっしやったの」。さあ、今にそれがわかるでしょうがね。あの方の歳から言っても、そう古いことではないでしょうよ。

「一匹でお出になったのでしょうか。そうじゃないでしょう。」みんなで行ったの、少なくともこの家の「鼠」さんだけは、確か、そんなことを聞きましたよ。



《夢二画集 都会の巻》 1911年
《青い海超えはるばると》 1914年



左図
右図



《晩春》 1926年 中図